

木造公共施設のある漁業集落の暮らし : ArchiAid における震災復興活動を通して

著者	遠藤 博明
出版者	法政大学大学院デザイン工学研究科
雑誌名	法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編
巻	2
ページ	1-3
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.15002/00009373

木造公共施設のある漁業集落の暮らし -ArchiAid における震災復興活動を通して-

THE LIFE IN THE FISHERY SETTLEMENT WITH WOODEN PUBLIC FACILITIES
-THROUGH THE ACTIVITIES FOR THE EARTHQUAKE RECOVERY BY ARCHIAID -

遠藤博明

Hiroaki ENDO

主査 下吹越武人 副査 渡邊眞理・網野禎昭

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The relocation of fishery settlement to the upland is executed by the local government due to the huge effect by Japan great earthquake on March 2011. Oginohama city has one of the disaster harbors where most of buildings was swept up by the tsunami. The half of refugee who lost their house in this area are immigrating into urban city area. Meanwhile, Oginohama city is developing the public project moving city function including public facilities and the residential area to upland for avoiding the possibility that the city will hit by Tsunami again in the future.. This paper tries to propose the functional public design even with the small number of households on the upland.

Key Words : *public facilities, Tohoku Earthquake and Tsunami, gabled roof,*

1. 設計概要

今回私が設計するものは複合公共施設である。

施設機能の内訳は支所・公民館・保育所・集会場

以上4つ

敷地は法政大学が ArchiAid を通して関わってきた宮城県石巻市荻浜

牡蠣養殖を生業としながら、57世帯163人が暮らしていた裕福な港湾施設の漁業集落であった。

設計する施設のうち、支所・公民館・保育所はもともとこの荻浜にそれぞれ独立して存在した施設であり、今回の設計はそれらの復旧の意味合いも含まれる。

津波による被災後、ほとんどの建築物が流され、住民の一部は都心部への移住など、人口の流出も起きている。2012年12月現在、荻浜に留まる意思を示しているのは16世帯となっている。

将来、再び起こりうるであろう津波への対応として、既存の住宅地跡は居住禁止地域となり、今回の津波と同等規模以上の津波が届かない標高の高い場所に移転するというのが安全な復興計画上の国家事業となっている。

決して多いとは言えない住民の新たな居住地として、荻浜西部に位置するヨコハマ山が新たな生活地として選ばれた。

16世帯の住民には高齢者も含まれ、現在16世帯のうち、10世帯が復興公営住宅での移住を希望している。

公営住宅に住むことになるであろう高齢者世帯を見守り、集落全体が寄り添って暮らす姿をこの浜における移転計画のあり方と考える。

また、既存で存在していた支所・公民館・保育所と、新たに集会場を加えて、複合の公共施設とし、高台移転する集落に併設するように計画することで、この浜の寄り添いに外部からの人の流れを生み、集落に交流が生まれる場所が形成する。

荻浜の持つ文化の継承と浜の将来像を考えるうえで、高台移転という閉鎖的な環境に公共施設が外向きの入り口として存在することを、人の対流を生む重要な要素として位置づけ、設計のコンセプトとする。

2. 敷地について

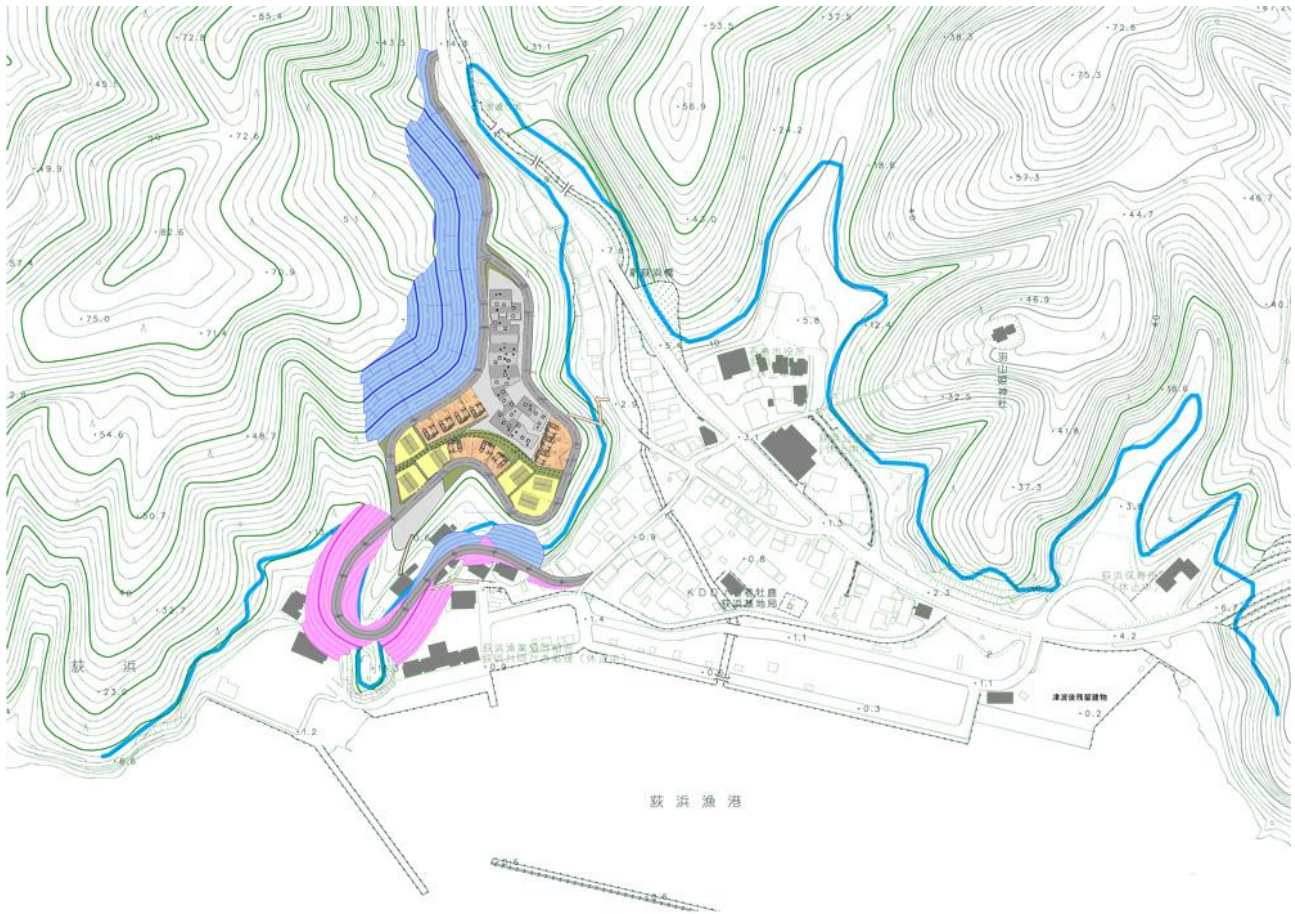


図1・荻浜とヨコハマ山の造成案

本設計において、敷地となる荻浜のヨコハマ山の高台移転地の計画は ArchiAid の復興計画上で私が計画提案したものを今回の修士設計向けに多少訂正したものである。

ヨコハマ山の山並みを添うように計画された外周道路に囲まれ、高台の道路は浜の中央を走る県道からアクセスし、浜の方へ抜けていくものである。

北側に山々が立ち並び、南側にリアスの湾となっている荻浜港が広がっている。

海へのアクセスと眺望は住民が最も気にすることであり、高台の南側に宅盤が敷かれ、北側に向かうほど標高の高くなる造成がされる。高齢者の移住する復興公営住宅に取り囲まれる様に、高台の北側から接する南北にリニアな敷地が、今回の複合公共施設の設計敷地として設定した箇所である。

3. 設計プロセス

3. 1. 連なる切妻屋根



図2・設計断面図

本設計の特徴的は点として、南北に展開される連続切妻屋根を挙げられる。設計地域である石巻市牡鹿半島は木造の大型な漁師住宅が多くみられる半島であり、津波の被災後も、残された建築や景観的な観点からも木造の住宅を再建することを提案したい。切妻屋根を持つ木造の住宅が多いこの地域において切妻の屋根を持つ建築を

設計することは景観上、自然なことであろう。

一方で、その切妻屋根が連続して現れることは異質なものであり、この建築を一段階別のものに変化させることが出来ると考える。その違和感がこの建築が地域における公共的象徴をなりえるような形態であると言えるだろう。

切妻屋根は棟高が一定の高さで展開し、それに対し敷地は南側ほど標高が下がるので、自然と北側に対して南側の切妻は大屋根になる。県道から見える北側は住宅のスケールに近い屋根なので自然な見え方をし、高台住宅地のある海側からは、集会場の機能が入る大屋根が現れ違う印象を与える。

3. 2. 立ち並ぶ壁

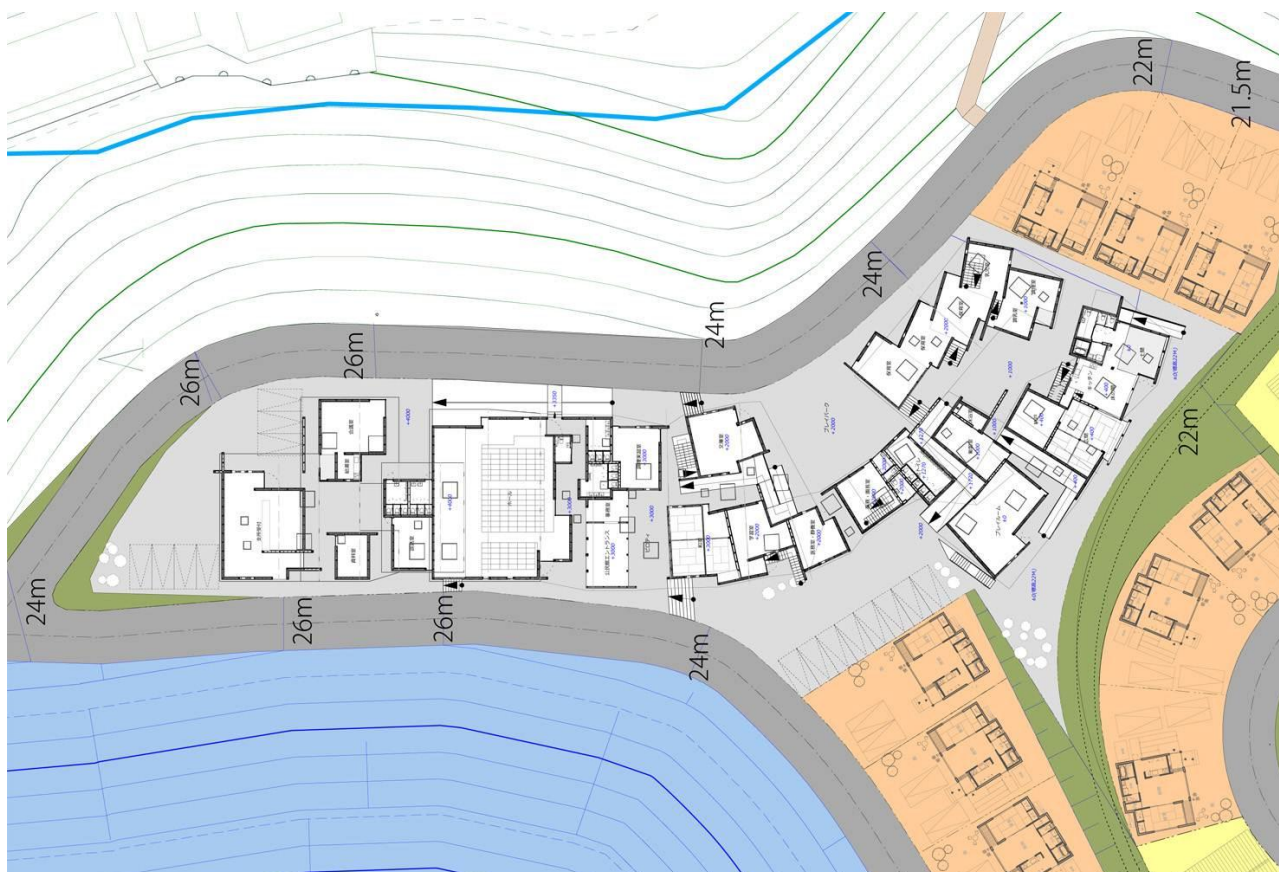


図3・設計平面図

切妻屋根が立ち上がる流れとは関係なく壁が立ち並ぶことで屋根の印象から受けるスケール感とは異なる空間の展開を狙う。採光と縦方向の印象付けの役割が強い屋根に対し、屋根とは独立して空間を形成する。敷地の長手方向に並行に展開する壁によって切妻によって規定されるように見える空間に連続性を生み出し、長手方向に垂直に展開する壁によって空間と通路の規定をする。

ボックスで空間が形成されるのではなく、壁の立ち上がりの組み合わせで空間が形成されるので、通常の木造軸組みでは起こりづらい空間が現れる。